末黒野

すぐろの

11月号（通巻867号）

末黒野　平成二十年十一月五日発行　第七十三巻第十一号（通巻八六七号）

芭蕉庵

昭和遠くなりけり灼くる草田男忌

竹の葉の艶めきそめぬ今朝の秋

橋越えて瀬音昂る涼新た

突き当たりは日蓮の寺竹の春

芭蕉庵芭蕉最も風受けて

空母出航島の芒に見送られ

物忘れ癖か病か秋暑し

天帝の持て余したる残暑かな

松本三千夫
（名誉主宰）

八千草

黒滝志麻子

釣宿に聞くや祭の稽古笛
サルビアの陰も日向も燃えてをり
曲がるたび変はる水音秋に入る
石垣の石の欠けたる秋暑かな
山の日や晴れ晴れと黄の泡立草
日帰りも確かなる旅秋気澄む
火に油注ぎしごとき赤カンナ
本堂のまちまちの丈秋簾
爽やかや登りて低き山の景
かなかなや百樹の森を震はせて
色鳥の声の零るる庵かな
佇めば草の錦の只中に
八千草の匂ひて雨の上りけり

山気

森清堯

炎帝や誰も渡らぬ太鼓橋

乗船の合図のとどき行々子

山百合の群れて隠沼やはらげり

水打つて平成の風惜しみけり

里の子と競ふ水切り雲の峰

楢が枝に乾びて白し蛇の衣

松風にまじる潮騒今日の秋

乾ききる磧にひとり広島忌

ひぐらしや片付け急ぐ庭仕事

あきつ飛ぶ日和となりぬ谷戸の小田

鳥兜富士の裾野の山気満ち

小流の石積の堰秋の声

甲矢集

配列は音順（当月巻頭作家は次号は末尾になり以下同じ）

花火

田中臥石

台風の一過の漁港船動く
河鹿宿妻と三日の保養旅
欠き氷残暑もろとも噛み砕く
夏ばてや鱧でよからうレストラン
遠花火聴きつ稿書く夜の秋
花火果て波音ばかり残りけり
座しゐても汗流れけり文机
立秋の街空へ乗るモノレール
夜の残暑停電無策の刻余す
山宿のむらさきほのと薯預汁
蟾蜍のたりと故郷遠きかな

暁の空

森清信子

夏帽の少女ののぞき飾り窓
大岩に砕くる流れ青胡桃
木道を曲がれば展け晩夏光
弛みなき滝一条の響きかな
かなかなやかすかに白む暁の空
新涼の鏡の如き池塘かな
笹原の木道乾き赤とんぼ
谷戸奥の大き古民家木槿垣
草伸びたる白き磧や秋暑し
早稲の香や盆地明るき天気雨
子らに聞く谷戸の抜け道芒原

遠河鹿

安斎久英

てのひらに雨後の重さや七変化
沖の帆を望み晩夏のカフェテラス
峰雲のほぐれ組まるる安房上総
噴水や老いても夢は捨てきれず
早暁の雲獣めき戻り梅雨
中天に活かび大暑の十日月
誰彼と黄泉へ旅立ち遠河鹿
茜雲これ程までに美しき夏至
中空に鳥影もなし敗戦忌
敗戦忌曽ては夫の復員日
台風の事なきを得し雲のさま

百日紅

石黒興平

古民家の黒き羽目板半夏咲く
ファックスの紙のさらさら梅雨あがる
薄明りさすや秘仏の堂涼し
休みなく水をくすぐる水すまし
百日を咲き継ぐ勢百日紅
流鏑馬の出を待つ馬の昂ぶれり
炎天やバス待つ人の行者顔
夏霧や檣灯淡き繋り船
張替への網戸誘ふ夜風かな
日の火照り残る埠頭や花火待つ
葉裏見せ風に応ふる蓮かな

今朝の秋

岡野里子

芙美子忌の夏野の空や根無雲
浜風のはこぶ香りや花茨
羽ひらく海鵜の十字向ひ風
棕櫚の花海どこまでも碧碧と
鳶の鳴く島の真昼や花梯梧
三本のマストを縫うて夏つばめ
炎昼の波のうねりや繋り舟
遠富士の被く笠雲今朝の秋
灯台へのぼる木道カンナ燃ゆ
秋蝶や沖を見つむる少女像
花屋より藁の匂ひや盆支度

乙矢集

配列は音順（当月巻頭作家は次号は末尾になり以下同じ）

悟り人　小田嶋野笛

レース着て刀自の銀髪きらめけり
二尺程跳ねてもみたり羽抜鶏
息吸へば熱風至る肺腑かな
大雨の洗ひ上げたる夏の月
端居して喜寿は俄の悟り人
本に飽きテレビに倦みて夏の風邪
夏痩の胃の腑へ流す茶漬かな

初蝉　加藤静江

初蝉や開く庵の明り窓
初蝉や古墳の森の昼の闇
産土の三色の幣夏祓
浜占むる明日祭りの白テント
売り切れの農協野菜朝ぐもり
吹き抜くる風鈴市の風熱し
大楠の揺らぎのつづく風は秋

江戸切子　菅野日出子

海紅豆燃えて離宮の船着き場
日暮待つ納涼船や神田川
重さうなるピアスのゆるる夏帽子
カクテルの氷ぐらりと江戸切子
原宿は若者の街サングラス
下駄の緒をゆるめて孫の白ゆかた
母の歳とうに越えたり茄子の馬

青炎集

黒滝志麻子選

横浜　布施由岐子

心電図の機器付けくぐる麻暖簾
ぶんぶんと羽音の忙しお花畑
雲を染め山を染めゆく大夕焼
山峡を下る電車や合歓の花
停車せる駅舎は朽ちて夏の草
五月蠅なす神の逆走迷走も

横浜　長尾タイ

連を組む揃ひの浴衣町を練る
月見草薄暮の彩を纏ひ初む
原爆忌朗読の子の凛凛しかり
総門の十六羅漢秋の声
料峭の古刹の跡やつくつくし
零余飯かみしむる程妣の味

横浜　木下晃

一切のもの放り出す酷暑かな
烏瓜今にも壊れさうに咲き
糠漬の青さ保てる胡瓜かな
ティーシャツの汗搾りたし書合宿
秋立つや夜明けの風を頬に受く
風を待ち石をはなれぬ蜻蛉かな

横浜　根本公子

雪洞に心と一文字夏祓
気配消し眠る鸚哥や熱帯夜
滲み出てしたたる滝の青きかな
住民の倍のにぎはひ村祭
万緑に抱かるる百戸草芝居
子供らの受け継ぐ歌舞伎風涼し

横浜　阿部重夫

交番の巡査かすめて夏燕
明太子のほどよき辛さ冷し酒
体温を越ゆる気温や田水沸く
手花火のそれぞれに持つ輪の中に
詔勅を聞きしあの日や蝉時雨
境内のラジオ体操涼新た

横浜　小池みな

晴れ続き夕べの青田広びろと
デイケアへ車窓の世界百日紅
夕蝉の声に膨らむ大樹かな
透明の浅瀬へ浸す素足かな
水分の嬉しき西瓜食みにけり
盂蘭盆の鷺の一羽や三角洲

横浜　正谷民夫

雨安居やいのちつぎつぎ生まれくる
ひゆんひゆんと騒々々と草刈られ
噴水の虹の向かうへ逃ぐる君
渺茫と鬼糸巻鱈（マンタ）の海のひるがへる
夏富士のその頂を眼で登る
空蝉に墓標はなかり風の掃く

町田　伴秋草

紅き緒の下駄踏み鳴らす浴衣の子
階段の一段毎の暑さかな
もあとした空気の街や百日紅
門柱に凭れ外向く茄子の牛
湯浴みせり土用丑の日未だ暮れず
掬はれぬ流し索麺旅に落つ

横浜　岩崎スミ子

落蝉の足の動きやバスの床
空蝉の重さを揺らす草の上
炎昼や雀の残す土埃
枝豆の小袋追加レジの籠
点滴の静寂や突と虫の声
新涼の風深く吸ふ女坂

横浜　伊藤由良

風集めゆたにたゆたに百日紅
浜木綿のたくましき花芳しく
何はさて正午の祷り敗戦日
昼寝覚め夢のつづきの夫追ひぬ
肩こらぬ本に明け暮れ暑に籠もり
炎昼や人つ子一人見えぬ町

栗原　千葉恵美子

畑隅の仙台萩や大株に
玻璃戸あけ庭の虫の音しばしかな
爽やかな夫の眉にも白きもの
今宵また虫の世界に浸りけり
秋海棠祈りの如く頭垂れ
吾亦紅手に子供等の山下る

耕土集

森清　堯選

雲の峰翼あるもの騒めきぬ
岩肌に日の映ろふや登山道
風鈴の跡絶ゆる音の余韻かな
炎天や重たき音の水車小屋
大夕焼見惚れ魚を焦がしけり

横浜　五十嵐富士子

文月や多羅葉の葉の便り出し
切りたての切口白し秋茄子
蜩の声に終はれる一日かな
薄紙を剥ぐやう秋の気配かな
鳳仙花の種をはじかせ風走る

横浜　喜田　君江

容赦なき征矢の炎帝足竦む
するすると光伸ばしぬ青蜥蜴
空蟬の寝床さながら楷大樹
終戦日防空壕の車庫在りき
布袋めく三人の兄や生身魂

横浜　松橋　輝子

葉巻には成らぬ巻葉や蓮浮葉
日盛や妻の仰せの枝払ひ
水飯や現世の垢を洗ふごと
逆走の嵐の過ぎて蝉時雨
幾度も暑気を払ひて払ひ得ず一

横浜　小長谷　紘

アロハシャツ夫のごろ寝の太鼓腹
三伏の日日靴持ちて泣く童
一品のサラダの香り新牛蒡
蝉穴や一斉蜂起の庭の朝
住職の力む法話や水陸会

横浜　中里　昌江

風すさぶ崩崖の鬼百合五百里波
明日待たぬ夕菅丘に一斉に
土用波船酔ひしたる大男
戦なき基地の街暮れ終戦忌
語り合ふ八十路の記憶敗戦日

横須賀　久保寺眞佐子

御題目

小川玉泉
（名誉顧問）

白極めをり早朝の酔芙蓉

大雨去り声を揃へる朝の蝉

鳴く蝉へにじり寄つたり鳴かぬ蝉

思ひきや陶の火鉢の目高殖ゆ

棚経の僧に合はせて御題目

江の島の浮かび上がりぬ大花火

雑記帳　16

我が家は日蓮宗である。旧暦でお盆の行事を行う。八月十五日の本山での施餓鬼法要に先立って、副住職が檀家を巡って読経を上げてくれる。先祖への感謝を込める行事である。